

修 訂
毛 利 式
日 本 速 記 法

毛 利 高 範 著



東 京
毛 利 速 記 研 究 所

序

明治十五年田鎖綱紀氏が、邦語速記術を發表して以來、著しい發達を遂げて、數種の方法が世に出たけれども、皆田鎖式と同じやうに、圓形を八分した幾何學的の線を記號につかひ、省略するのには、略綴と略符とを用ふるの方法以外に出なかつたのである。

元來速記法には、文字的と幾何學的との二大派がある。前者は羅馬字に似た字形で、同じ方向に筆を動かすから、書くのに甚だ都合がよいけれども、後者は全くそれと違つて居るので、其便否は論ずるまでもないのである。

それゆゑ自分は、此文字的の速記術を組立てやうと企て、二十九年の間、幾多の研究を重ねた結果、一の新法を發見して、日本

速記法と名づけたのである。さうして最も特色とするのは、語法を直接に速記上に應用した略韻法略音法の制定であつて、本法の價値も亦茲に存するのである。

此速記法は簡明な、しつかりした法則で統一してあるから、學ぶのには少しも器械的の諳記はいらないので、上達するのに容易だから、多方面に效用をあらはして、時勢の進運を裨補することが出來たならば、著者の本懐これに過ぎぬのである。

大正九年三月

著 者 識

目 次

第一部 初等速記法	1—31
第一章 音聲分類編	1
第一節 開 講	1
第二節 文字の大別	2
第三節 音の大別	4
第四節 母 韻	5
第五節 發 聲	6
第二章 速記文字編	10
第六節 速記文字	10
第七節 發聲字	11
第八節 母韻字	17
第九節 書 線	19
第十節 成熟音字	19
第十一節 文字の連綴	25
第十二節 假名遣	30

第二部 高等速記法	32—54
第三章 省略編	32
第十三節 總論	32
第十四節 略韻法	34
第十五節 略音法	36
第十六節 二音語略法	38
第十七節 三音語以上の略法	44
第十八節 特別略法	47
第十九節 數字	48
第二十節 自由略法	49
第二十一節 速記の實例	52



第一部 初等速記法

第一章 音聲分類編

第一節 開講

日本速記法とは、我々國民が互に話合ふ言語を、同じ速さで、残らず書寫す方法を説くのである。

速記法を分けて二部とする。一部を初等速記法、一部を高等速記法と名づける。初等速記法といふのは、速記術を學ぼうとするものの、是非とも最初に知らねばならぬ事柄を述べるので、丁度小學教育に當り、尙ほ進んで高等教育を受ける階段となるのである。初等部では、速記文字の成立から連綴の方法を教へ、高等部では、文字省畧の方法を説

くのである。又初等部では、速記文字の練習が主であつて、總て書くのであるから非省畧科ともいはれ、従つて高等部は省畧科ともいひ得るのである。さうして此省畧は、初等部修得の力によつて成遂げられるのであるから、十分これに熟達するの必要ある事を忘れてはならぬ。これから初等速記法を詳述するの順序として、先づ文字の解説から始める事とした。

第 二 節 文 字 の 大 別

言語を書寫すに、文字が必要なのはいふまでもないが、羅馬字にしても假名にしても、在來のものでは畫數が多くて、早く書くのに不適當であるから、別に簡単な記號、即ち一種の速記文字を作つて、これに適應せしめねばならぬのである。

普通の文字には、音標文字と形象文字との二種があつて、我國の假名のやうに、一字で一音をあら

はすのを成熟音字といひ、羅馬字や朝鮮諺文のやうに、發聲と母韻と各別に字形があるのを字母字と稱へ、どちらも音の記號となるまでの字であるから、音標字又は音符字といひ、漢字のやうに、一字で一語の意義あるものを形象字といふのである。

形象字は事物の形象をあらはすもので、語毎に字を要するから其數は極て多い。成熟音字は一字で一個の音をあらはすから、音數だけの字を要する。字母字は發聲と母韻と各別に字を作つて、これを組合せて一個の音をあらはすから、最も少ない字數で其用を辨じ得るのである。

速記文字は、極て簡単な仕組にせねばならぬのであるから、其字數の一番少ない字母字の法則に據るのが至當である。字母字の組織を採る以上、母韻と發聲とを解説するの必要がある。これを出發點として、速記文字制定の理論と實際とを説かうと思ふ。

第三節

音の大別

五十音圖の諸音を大別すると、母韻と成熟音との二種となつて、**あいうえお**は母韻で、他は皆成熟音である。この五母韻は **あ**—**ゎ** **い**—**ゐ** と長く唱へても、其韻をかへぬから單純音とも稱へる。然るに成熟音の總ては、全くこれとちがつて長く唱へると、**か**—**ゝ** となつて **あ**の韻が出て、きを長く唱へると、**き**—**ゝ** となつて **い**の韻が出る。それでくは **う** とかはり、けは **え** とかはり、こは **お** とかはるのである。

前に述べたやうに、母韻は單一だけれども、成熟音は、發聲と母韻との二つから成立つのである。五十音圖の各行には、何れも發聲といふものがあつて、この發聲に **あ** を配合すると、**あ** と同段の **かさたなはまやらわ**の諸音が出来、又この發聲に **い** を配合すると、**い** と同段の **きしちにひみいりる**の諸音が出来るのである。これから發音の状

態を説いて、速記文字に適用して見やう。

第四節

母韻

母韻は口を開ける廣さと、舌の上げ方との兩方から、發音の模様を説かう。

あ

あを出すには、舌を自然の位置、即ち下齒の内側に平に置いて、口を廣くあけ氣息を通ずるのである。

い

いを出すには僅に口を開いて、舌を高く上げて發するのである。

う

うを出すには殆ど口を合せ、舌を下げて發するのである。

え

えを出すには、舌をあの時よりもすこし高くして、口をいの時よりもすこし広くするのである。

お

おを出すには、うの時よりも口を広くあけ、舌を最も下げるのである。

此五母韻をくらべると、舌の上り方ではいが一番高く、うおは低くつてえあは其間である。また口の開き方は、いえうが狭くつてあおは廣いのである。因て舌を高中低の三段に分け、口を廣狭の二つに分ける。

第 五 節

發 聲

發聲はまだ音とならない、母韻と合して音となるわけは前に述べたけれども、我國には發聲をあ

らはす文字がないので、甚だ不便だから、片假名(五十音圖の第一段又は第三段の成熟音字)の上部に符號をつけてあらはす事にする。

カ ガ 𑖕

カは舌根で喉頭を塞いで、急に破裂せしめるやうにして出すので、ガはそれを強くし、𑖕は氣息を鼻に通ずるだけの違である。さうして此𑖕は、關西地方の一部と九州人とはつかはぬ音で、例へば君が代のが、影のげ、名古屋のごであつて、東海東山北陸北海道の人とがいひあらはす音である。

𑖖 𑖗

𑖖を出すには、舌の尖を前齒にさはらせ、氣息を吹出すので、𑖗はそれを強くするだけである。

タ タ

タを出すには、舌の尖を前齒にあて、それを押破るやうにするのである。

ナ

ナを出すには、舌の尖で上齶を撫で、氣息を鼻に通ずるのである。

ハ

ハを出すには、喉頭に軽く氣息をあてるのである。

パ　　バ

パバを出すには、唇を密閉してそれを吹破るやうにする。

マ

マを出すには、唇を閉じて氣息を鼻に通ずるのである。

ヤ

ヤを出すには、喉頭と舌面とに氣息を觸れさせるのである。

ラ　　ラ

ラを出すには、舌の尖で軽く上齶を摩擦する。ラはそれをひどくするので所謂卷舌である。

ウ　　ウ

ウを出すには、唇を近づけ氣息を吹出すので、それを強くするとウとなるのである。

以上列記の諸發聲を概別すると、カガガハヤは喉に關して、タダサザララナは舌に關して、パバフウマは唇に關して起り、またカガタダパバは破裂させるやうにして、ハヤサザフウは氣息を呼出して、ガナマは鼻に通じて、ララは摩擦するやうにして起る。因てこれを關喉類關唇類關舌類の三つに分け、また破裂的呼息的摩擦的通鼻的の四つに分ける。

第二章 速記文字編

第六節 速記文字

前章で分類を定めた發聲の同種類が、互に似てゐるやうに、字形も亦互に似てゐなければならぬ。甲の音と乙の音とはよく似てゐるのに、これをあはす字形が、まるで違つてゐては、實際に於て非常に不便を感じるから音の似方が近ければ近い程、字形も亦それだけよく似るやうに、速記文字を作るのは極めて必要なことである。

速記文字は簡單明瞭で、運筆の輕快なるを尙ぶのである、文字を書くのに、同じ方向に筆を走らせるのが、容易で早いのはいふまでもない。又手を動かす上からも、横行に書くのは、縦行に書くよりも便利である。因て速記文字は、一斜線／を基礎とし

て諸文字を作り、左より右へ横行に書くのである。

發聲をあはす文字に斜線を用ひ、其斜線と斜線との間を連結する線を母韻に配つて、同じ方向に筆を運ぶのである。



第七節 發聲字

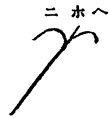
斜線を發聲に配當するの仕方は、かういふ聲だから、かういふ形であらはずといふのではない、實際上の便宜、即ち多くつかはるゝ音には、なるだけ書易い字形を配ると同時に、組合せ文字を作る都合をも參酌して、配當するのである。

字形として採り得る斜線に三種あつて、イ左方即ち前に曲げる者、口鋭く止まる者、ハ右方即ち後に曲げる者である。イを關唇類に、口を關喉類

に、ハを關舌類に充てやう。



斜線の上も亦三體にかはり、ニ前方より曲げる者、ホ鋭く始める者、へ後方より曲げる者である。ニを破裂的に、ホを通鼻的に、へを呼息的に配當し、摩擦的には圓形を用ふる。



この兩形を合すれば次のやうになる。



これが發聲文字の根原で、イロハを筆尾、ニホへを起筆といひ、これを直音の發聲として、其字形を次の圖の通りにきめる。

起筆尾	破裂的 前方より 曲げる	呼息的 後方より 曲げる	摩擦的 圓形	通鼻的 鋭く始め る
關喉類 鋭く止める	カ ガ	ハ ヤ		ガ
關舌類 後方に曲げる	タ ダ	サ ザ	ウ ヱ	ナ
關唇類 前方に曲げる	パ バ	フ フ		マ

直音の發聲文字は單一であるけれども、拗音の發聲は二發聲を組合せて作るのである。此拗音はや音に關係するものが多い、元來や行の發聲は母韻のいに似てゐて、これに又母韻を添へ、二母韻重つてやゆよの音が出来るので、拗音びゃ みゃ等の韻ともなるのである。例へばびみのやうな音に含まれるいの韻に、あが伴ふとびゃ、みゃとなり、うが伴ふとびゅ、みゅとなり、おが伴ふとびょ、みょとなり、又き、うり(黃瓜)のかはつてきゆうりと

なり、しあはせ(仕合)のかはつて し、やはせとな
り、いりあひ(入合)のかはつて いりやひとなる
ので悟られるであらう。

わ行の發聲 うも母韻の うに似て、これに又母
韻を加へ、二母韻重なつてわ行の音が出来るので、
くわ、ぐわの韻ともなるのである。

以上述べたやうに、拗音は やうに關係してをる
から、拗音の發聲は直音の發聲と、や又は うと組
合せてつくるのである。

き + り きり

かにやを結びてつくる。フに尸を加へると 𠄎
形になるから、上記の字形を得た。

く + り ぐり

フに尸を加へると 𠄎形となる。さうしてこの中
間の圓形を省いて、これを 𠄎 とする。實をいふ
と うの部分濃く記す筈であるが、一半を淡く一
半を濃くするのは、疾書上困難であるから、全部を

淡く記すのである。後の二字は別に説明は要しまい。

て + り てる

𠄎に尸を結んで、上記の字形を得たのである。

つ + り てる

𠄎と𠄎とを組合せると 𠄎形となる。此𠄎の部分
を縮めて、上記の字形を得た。

ぴ + り ぴり

𠄎と𠄎とを連結してつくる。フに尸を加へる
と 𠄎形となるから、上記の字形を得た。

し + り 𠄎

𠄎と𠄎との結合に象つて、上部の圓形を大きく
記すのである。

ち + り 𠄎

𠄎の圓形内に、小形の 𠄎字を加へてあらはす

のである。

ウヤル

シヤ字をつくつたと同じやうに、ウ字上部の圓形を大きく記すのである。

ピヤル

ハとヤとを結合するとル形となるから、其意をとつて上記の字形が出来た。

ミヤル

マの上部にヤ字起筆の意を加へ、上記の字形を得た。

ニヤル

ミヤと同じわけで、上記のやうにする。

ギヤル

これも前項と同じである。

リヤル リヤル

ラヤの圓形内にヤの筆意を加へたもので、何れかの部分に角をつければよいのである。

第 八 節

母 韻 字

發聲文字の中間を連結する線を、母韻に配當するのであるが、開口の廣い者には、首尾鋭い短線をつけて、其狭い者と區別する。これを示廣標といつて、母韻相互の連結線ともなる。

うおの二音は、舌の位置が最も低いのであるから、平な線であらはず事にする。

えあの兩音は、舌の位置がうおの兩音よりも高いから、斜に上る線であらはず事にする。

いは舌の位置が最も高いのであるから、えあよりも尙ほ高い線であらはずのが至當だけれども、本法の組織上、母韻全部を等しい空間に收めなけ

ればならないので、えあよりも一層斜なる線を用ふる。それは、より高い者を同じ空間に収めたのに象つたのである。

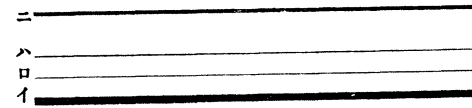
		開口の度	
		廣	狭
舌の上り方	高		い —
	中	あ ㄥ	え —
	底	お ㄥ	う —

上圖の外にあいといふ字がある、これはいに示廣標をつけたものであるㄥ。



第九節 書線

速記文字を書綴るについて、必要なのは書線である。書線は文字の高さと字列とを、正しくする爲に設けた線である。



書線は四個の線から成立つて、イを書線といひ、他を中間線と稱へる。イニの高さに書くのを二階文字といひ、イハの高さに書くのを一階文字といひ、イロの高さに書くのを半階文字と稱へる。



第十節 成熟音字

發聲文字の高さを一階ときめ、成熟音をあらはすには發聲と母韻とを結付ける。

行 屬	母 韻 聲	あ	い	う	え	お
		ー	ー	ー	ー	ー
か	カ	か	き	く	け	こ
	カ	か	き	く	げ	こ
行	カ	きゃ		きゅ		きょ
	カ	きゃ		ぎゅ		ぎょ
屬	カ	くゃ				
	カ	ぐゃ				
は 行 屬	ハ	は	ひ		へ	ほ
	ハ	ひゃ		ひゅ		ひょ
や 行 屬	ハ	や		ゆ		よ

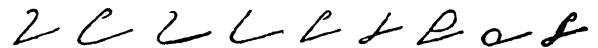
た	タ	た			て	と
	タ	だ			で	ど
行	タ	ちゃ	ち	ちゅ		ちょ
	タ	つぁ		つゅ		つょ
屬	タ	さ		す	せ	そ
	タ	ざ		ず	ぜ	ぞ
さ	サ	しゃ	し	しゅ		しょ
	サ	じゃ	じ	じゅ		じょ
行	サ	ら	り	る	れ	ろ
	サ	りゃ		りゅ		りょ
屬	サ					
	サ					

な 行 屬	な	に	ぬ	ね	の
	に _ゃ	に _ゅ	に _ょ		
ば 行 屬	は	び	ぶ	べ	ほ
	び _ゃ	び _ゅ	び _ょ		
ふ 行 屬	ふ	み	む	め	も
	み _ゃ	み _ゅ	み _ょ		

母韻の本體は半階である、發聲と結付ける時は一階の高さに引延ばすのである。

開口の廣い母韻が發聲に結付く時は、發聲字を二階の高さとする。其わけは示廣の短線が發聲字の筆尾と、連續するの意をあらはすのであるが、發聲字は一階、示廣標は半階であるから、これを一階半とするのが至當であるけれども、實際に於て、一階と一階半とを書分けるのは困難であるから、二階の高さに引延ばして、一階文字との區別を明にするのである。

母韻あい、か、さ、た、な の母韻をいと 同じ開きにして、次のやうに書くのである。

かい さい たい ない はい まい やい らい わい


前に掲げた成熟音表は、實用上必要なもののみを選んだのであるが、其音の種類によつて、各行の所屬を定めた故、五十音圖の縦行の音が、所々に離れたので、其わけを説明して置くのも、あながち無用ではあるまい。

さ行を分けてしをしゃ行に入れたのは、さすせそを出すよりも強く氣息を吹出して、しゃ、しゅ、し、を出すのとははらないからである。

た行を分けてたてとを一行としたのは、同じ舌音とはいへ、舌の動方に違があるからである。軽く舌を動かせば、たてとの音は出るけれども、ち舌を壓出すやうにして、ちゃ、ちゅ、ちよ、を唱へると同じであるから其行にいれ、又つは一層強く舌を壓出して、つぁ、つぉ を出すのと同じだから、つぁ行に入れたのである。

は行を離したのは、はひへほの四音は喉から出て、ふばかりは唇にさはつて、ふぁ、ふぉ を出すのと違はないからである。

た行屬のおづちゃ、ちゅ、ちよを省いたのは、じずじゃ、じゅ、じよと發音するからである。

わ行のゐゑうを、や行のいえを省いたのは、近世の發音が母韻のいえうおと違はないからである。

次に行屬とは、省略の原則から起つたもので、假

令ばか行屬といへばか行と同一の支配を受けるもの、又は受け得らるゝものをいふので、此事は第二部になつて自然明になつてくるから、此處には略してをく。


第十一節

文字の連綴

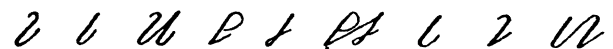
速記文字の形狀は説き畢つたから、速記文字連綴の例を示さう。


第一 一階文字と一階文字とを連綴するには、書線に位置をきめる。う韻お韻の成熟音が前に在る時は、次の字は書線の下に自然と出るのである。書線に位置をきめるとは、文字の筆尾が書線に止まるやうに書く事をいふのである。


み	す	簾	せ	く	急	き	く	菊
↘	ㄥ	ㄥ	ㄥ	2	ㄥ	2	2	2
す	み	墨	く	せ	癖	く	き	莖
ㄥ	↘	ㄥ	2	ㄥ	ㄥ	2	2	2

飯 敵 響 月 鮎 吝



第二 二階文字と二階文字とを連綴するには、書線に位置をとつて、初の字の母韻を、次の字の高さまで引延ばして、一と筆に書くのである。

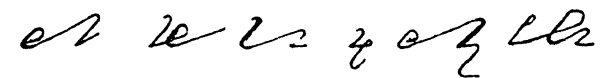
た な 棚 や ま 山 な か 中


ま だ 未 たいこ 太鼓 た こ 凧


川 窓 内外 鋒 小屋 細



第三 一階文字と二階文字とを連綴し、二階文字と一階文字とを連綴するの例を示さう。

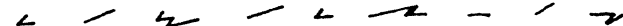
き た 北 た け 竹 か め 龜


鹿 家事 大工 草 仕事 拜借



第四 母韻を互に連綴するには、書線に位置を


とつて、相互の間を淡線にて連結し、あ、おとあいの三音が後に在るときは、其連結線を濃く記すのである。

あ お 青 う お 魚 い え 家


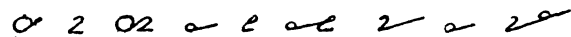
お い 老 い お 庵 う え 上


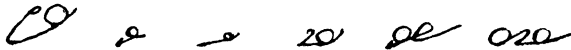
第五 母韻を成熟音の前後に連綴するの例を示さう。

あ さ 朝 あ み 網 え だ 枝


顔 前 愛想 痛い うそ 啞


第六 ら行の連綴は次のやうにする。

ら く 樂 り す 栗鼠 きり 桐


皿 ある いれ 倉 嵐 落雷


りゃ行は任意に圓形の一部に角をつけて、直音と區別するのである。

第七 長音をあらはすには、母韻の長さを二倍に引延ばすのである。又文字の上に短斜線をつけても宜しい、併し第一部では殆ど無用であるが、第二部では入用の時がある。

家庭 生計 形況 英雄 計略 氣流

kaidei seikei keikyō eiyū keiryaku kiryū

定期 會計

teiki keisai

第八 鼻聲をあらはすには、其上部に平線をつけるのである。

天氣 原案 艱難 戰爭 千金丹 安心

tenki genan kangan sensō chinkindan anshin

第九 促聲は上部に小點をつけるのである。

結構 節句 學校 立身 薄荷 厄介

kekkō sekku gakkō tachibana hōhō ekkai

第十 同一の速記文字を重ねるを疊字といひ、半階の彎狀符を用ふる、時宜によつては同文字を再記しても妨ないのである。さうして彎狀符を用ふるときは



父 母 桃 唯 硯 粉米

chichi haha momo yui en dobowari

と書き、又長音で繰返す時は



粗相 孝行 堂々 茫々 方法

chōsō kōkō dōdō mōmō hōhō




と書いて、二音以上の場合には、最初の音が軽く繰返される時は  符を用ひ、重い時は  符を用ふる。

こそこそ 色々 様々 時々









kosokoso shirōshirō yōyō tokiyō

異りたる速記文字で同意味を繰返す場合、例へば、*chichi* 日々のやうなのは疊音符を用ひない、又 *chōsō* 幅  略も同様に速記文字で記し、*chōchō* 遙々  廣々のやうに、二音以上の時は疊音符の

位置を次のやうにかへるのである。

遙	廣	花
		

第十一 速記文字を裝飾的に用ふる時、うお兩韻の成熟音字が續く場合とら行の諸文字とは、皆書線上に並べる方が工合がよいから、次のやうに書く事とする。

オノト	速記法	底倉	横田
			
奈良	森	寺	胡桃
			

第十二節

假名遣

速記法は從來の假名遣によらないで、耳に聞えるまゝを書取るのである。例へば八幡はやわた庭はにわ宵はよい家はいえ鶯はうぐいすと書く

のである。

長音の假名遣も、同音で種々違つてゐるけれども、これ又耳に聞えるまゝを寫すのである。例へば家庭は かて—笑ふは わろ—記入は きにゆ—開明は かいめ—相方は そ—ほ—摺要は す—よ—事業は じぎよ—流行は りゆ—こ—と寫すのである。

速記文字にて書いたものを、普通文字に書改めるのを復文といひ、復文では普通の假名遣に據らねばならぬ。

第二部 高等速記法

第三章 省略編

第十三節 總論

同方向の斜線で組織した速記文字は、運筆が自然で輕快であるけれども、出來得る限り其速力を増して、急速なる辯論を寫す時でも餘裕があるやうに、文字を省略するの必要がある。

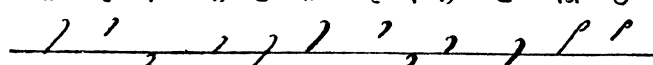
日常最も多くつかはれる言語は、一音づゝ書綴るの煩しさを避けるため、其言語に代用する略字を作つて、速力を増さうとするのは、從來の速記術に見る所であるが、これを以て完全な方法とは言難いのである。さうして常用の言語はいふまでも

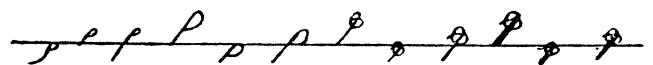
なく、専門的用語等をあげてくれば、其數は非常なもので、よし畧字を制定するとしても、恐らく九牛の一毛であらう。まして簡明でなければならぬ略字の數が、多くなればなる程、亂雜不規則となつて、遂には自分勝手の符牒となり、法式としての價値は全くなくなつてしまう。たとへ如何なる方法でも、規則によつて成立つたものでなければ、完全とはいはれないのである。それゆゑ此法では、略字又は略符といふものを作らず、確とした規則の上に、省略法を制定して、これを略韻法略音法と名づける。

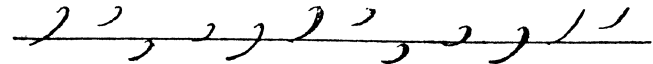
抑も略符は言語を主として作るのだから、一字を一語の意義につかひ、丁度形象字のやうに、其語以外に効力がないけれども、略音法は音が主であるから、人名であらうと地名であらうと、何でも構はず種々の語につかはれ、活用自在で甚だ便利である。これから順を逐ふて省略法を説明しやう。

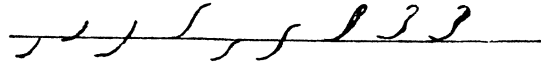
第十四節 略 韻 法

成熟音中、關喉類と關唇類との各文字は、母韻を書かないで、其音をあらはすの方法を略韻法といふので、我省略法の根本となるものである。此略法は母韻を開口の廣狹と、舌の位置を、高中低の三段に分けた原則に従つて、文字の位置を三段とし、次のやうに記載するのである。

か きく けこ が ぎぐげ ご は ひ


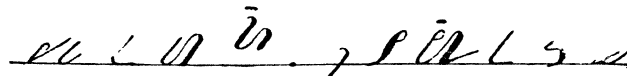
ふ へ ほ や ゆ よ き き き き ぎ ぎ ぎ ぎ


ば びぶ べぼ ば びぶ べぼ ま み


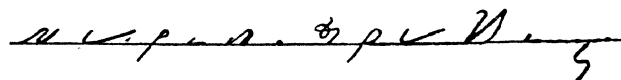
む めも み み み わ く ぐ


かけのやうに、書線上に在るのを中段といひ、きの位置を上段といひ、くこを下段と稱へる。さうして此場合關唇類の諸文字は、筆尾を結ばずに、はねたまゝにして置くのである。此方法は一音獨立の場合、又は一綴の最後の音のみに使用するもので、實例の二三を示さう。

下手の長談 子は三界の首柳



得手に帆をあげ 月夜に 釜を抜く



上例中首のびは、中段のやうに見えるけれども、一綴の初文字の位置が上段の時は、續けて書いた文字は初字と同一位と見なし、又抜くのくは、下段より低くなつてをるけれど、これも初文字のぬと同位置と見なすのである。

第十五節 略音法

前節の略韻法は、單に喉唇成熟音の五母韻を省くもので、其用は母韻だけであるけれども、略音法といふのは、成熟音の全部に對する省略の仕方で、二音記すが當前の所を、前音の母韻の形をかへるばかりで、後音をあらはすの方法である。

我國語を大別すると、語尾をかへる者と、かへない者との二つとなる。さうして語尾をかへる者の中で、話につかふ動詞の語尾は、次のやうに五段に變化する。

- | | | |
|----|---------|---------|
| 一段 | 字を書かない | 本を読まない |
| 二段 | 字を書きました | 本を読みました |
| 三段 | 字を書くのだ | 本を読むのだ |
| 四段 | 字を書け | 本を読め |
| 五段 | 字を書こう | 本を読もう |

此五段變化に應ずるの方法を定め、これを推擴めて不變化語に及ぼすのである。

略音法では語を分解して、一音語二音語及び三音語の獨立又は組合せとして、其方法を定めるのである。例へば

- | | | | | |
|--------|-----|--------|----|----|
| (1)花の色 | 月に雲 | (2)霞 | | |
| (3)月見 | 淺瀬 | (4)日影 | 田中 | 矢先 |
| (5)朝顔 | 有様 | (6)即ち | 甚だ | |
| (7)濱千鳥 | 村時雨 | (8)飛鳥山 | 柏餅 | |

の類で、(1)の花色月雲は二音語で、のにとは一音語、(2)は三音語、(3)は二音語と一音語とで出來た三音語、(4)は一音語と二音語とで出來た三音語、(5)は二音語二個から出來た四音語、(6)は四音語であるけれどもすな、わち。はな、はだ。と分解して應用し、(7)は二音語と三音語とで出來た五音語、(8)は三音語と二音語とで成立つた五音語とするのである。

長音鼻聲促聲は、音の數には加へないので、修業艱難、括弧のやうなのは二音語として數へる。

上記の例により、一音語二音語及び三音語を基礎として、省略の原則を次のやうにきめる。

第一原則 一音語は舌音の外、すべて略韻法に據る事とする。

第二原則 二音語は皆略音法に従ひ、か行の音が終に在る時は全く省き、又他の關喉類の諸音が終にある時は、略韻法によるも、略音法によるも隨意の事とする。

第三原則 三音語は(甲)其第三音を省くか、(乙)又は其第三音を無きものとして、二音語同様に取扱ふ事とする。

次に略音法では、運筆に支障のない程度で方向を異にする右斜、直立の二状態を採る。前者は直音を、後者は拗音を略するために用ふる事とする。

第十六節

二音語略法

第一 か行屬略法

こゝに掲げた諸語の第二音は、皆か行音で、此か行音は全く省き去らるゝのである、即ち第一音を

略韻法と同じ位置に記すのみで、第二音をあらはし得るのである。

坂 鹿 幾何 牀 結果 失火 勇氣 時
l e r e i e e l

關 莖 宅 德 咲く 行く 竹 酒
o l l l e l l

負け 聞け 風 聳 行こう 過去
t r l r e r

若し第二音が濁音である事を判然と示すには、略韻法に據らねばならぬが、普通の場合清濁を區別する必要はないのである。

拗音を省くするには直立體を用ひて、*ㄣ* 割據...*ㄣ*火急...*ㄣ*起業と記すのである。

又以上の例によると、宅と風と、行くと行こうとの區別がないので、稀に紛れる恐がある。これを防ぐには、一階文字を略韻法によつて書き、二階文字を絶対に省く事にする。

くゝ行をか行と同じやうに扱ふのは、音の分類

からいふと不当であるけれども、語の上から見ると、けんくわ(喧嘩)のけんかとなり、しゅうくわい(集會)のしゅうかいとなるやうに、くわは皆かとかはるから、省略法では此二行を同一に取扱ふのを便利とするのである。

第二 はや行屬略法

此兩行は略韻法によるか、又はか行と同じやうに取扱ふのである。ひや行には直立體を用ひ
 批評 投票のやうに記す事が出来る。

第三 た行屬略法

第二音がた行音なる時は、第一音の母韻を波状に變じ、つゝ行の時は其筆尾を左にはね、ちゃ行の時は直立體を用ふるのである。

肩 桁 沙汰 彌陀 縦 到底
 兄弟 事 鳩 瀬戸 生徒 ヤード

待つ 密 父 道 紅茶 議長

此例の中、父のやうなのは中段に書いて、疊音符を用ひても宜しいのである。

第四 さ行屬略法

第二音がさ行音なる時は、第一音の母韻を波状に變ずるのであるが、た行の時のやうに筆尾をはね上げないのである。又しゃ行の時は直立體とするのである。

土佐 風 店 汗 うせ 茄子
 水 磯 さぞ 記者 馬車 醫者
 石 櫛 清書 起證 名所 世襲

第五 ら行屬略法

ら行音を省くのには、半階の波状線を用ひ、りゃ行には直立體を用ひる。

殼	虎	藏	雁	鳥	誰

緒	あれ	暮	春	城	色

黒	寄留	風流	器量	棟梁	惣領

第六 な行屬略法

第二音がな行音である時は、次に示すやうに右向の斜線 \ ㄨ のどちらかを用ふる。うお兩韻の時は、母韻それ自身を斜に記し、にや行音には彎曲の直立體を用ふるのである。

皆	粉	花	谷	兄	國

絹	犬	金	姉	眞似	この

こね	者	記入	きによ

第七 ま行屬略法

關唇類の諸文字を省くのには、第一音の母韻を單に彎曲するのみである。さうして此彎曲體は主としてま行に用ひ、みゃ行を省くのには、直立體を用ふるのである。

山	熊	今	波	富	蟬

闇	飲む	止む	龜	嫁	梅

芋 友 鴨 肝 奇妙 功名

第八 ばふ行屬略法

この兩行の音を省くには、第七と同じやうに彎曲體を用ひ、びゃ、びゃ兩行を略すには、これも第七と同じく直立體を用ふる。若し他と紛れ易い時は略韻法によるのである。又小形のゝを獨立して書き、互爾乎波のわとして用ふる。

第十七節

三音語以上の略法

三音語以上の略法は、二音語を扱ふのと、何等異なる所はない、其要領を會得すれば、千言萬語立所に省略し得るのである。

略音法の第三原則甲法による時は

霞 月見 矢先 言葉 確

車 動く 淺瀬 日影 島

となり、乙法を用ふる時は、前後の關係に重を置き、疑の生ぜぬ場合は、次のやうに扱ふのである。

霞 矢先 確 車 寧ろ 恐らく 動く 日影 島

働、欺、のやうなのは とも とも書かれ、尙ほ進んでは ともなし得られる、熟練の程度によつて省略法は違つてくるけれども、反讀の難易と運筆の便否とを考へ、如何に書くべきかをきめるのである。次に五音語は二音語と三音語とで成立ち、六音語は三音語二個で成立つたものだから、其根本の二音語と三音語との省略法だけを了解すればよろしいのである。

第十八節
特別略法

特別略法は、談話中最も必要である助動詞(其他二三の語)の綴を縮めるもので、略韻略音兩法の應用に過ぎないのである。

ます又は します ませぬ又は ませぬ ました又は しましたとし、次のやうに變化させる。

ますの筆尾をまるめて まするとし、母韻のあいを筆尾に加へて ますまいとし、母韻のお—を筆尾に加へて ませうとし、筆尾にたの筆意を加へて ましてとし、筆尾にたの筆意を加へて ませぬでしたとし、又 ましたらう ません ませうと變化させるのである。

書かれ書かる話され話さる打たれ打たる笑はれ笑はる等の、かれ、され、たれ、はれ、かる、さる、たる、わる、は。にてあらはし、られに屬する者は左

廻り、らるに屬する者は右廻の圓形、又は其變形を用ひてあらはす事にする。即ち
をられ、られる、せられ、せられる、とし、を
らる、らるる、せらる、せらるる、とし、を
れるをるるをるれ、をるれ、をらるれ、せらる
れ、ときめる。さうして是等諸文字は位置について
のきまりはない。

又をめてめたとし、をばかり をなれば
をならばときめ、して、した、し
しき、しく、くのでくならぬけれども
けれども、ませぬけれどもと用ふる。

次に肯定否定についての標記を述べんに、肯定とは何々するといふ可能の助辭で、否定とは何々せずといふ不可能の助辭である。前者には、形を、後者には、形を用うるが、どちらも高さは一階で、其位置にきまりはない。欲する、欲すれ、欲せず、欲せざるとなし、これが受身となつた時は、前項に示した諸文字をつかふので、
欲せられ 欲せらる 欲

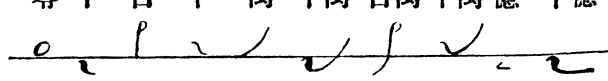
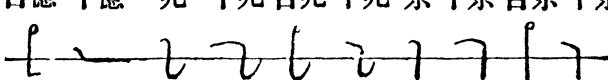
せられず、欲せられざるとし、尙ほ進んでは
 健康なる(れ) 健康ならず
 健康 ならざればとし、又此否定標は打消のずにも用ひる。

鼻聲標の位置をかへて なかん なんかん
 と讀むのである。又長聲標も其位置をかへて
 傾向 農工のやうに、次音の長呼を示す事が出来る。

第十九節 数字

数字は總て算用数字を用ひ、不定數の二十四五は 24^5 又は 24_5 五六十は 5^{60} 又は 5_{60} と記し、一つ二つは $\underline{12}$ と書き、二分の一は $2/1$ と記すのである。

數位は次のやうに書きあらはすのである。

零 十 百 千 萬 十萬 百萬 千萬 億 十億

 百億 千億 兆 十兆 百兆 千兆 京 十京 百京 千京


第二十節 自由略法

省略法の全體は已に説盡したから、最後に自由省略の方法を説かう。

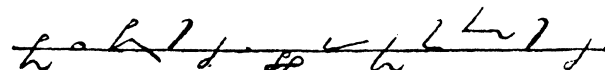
自由とはいふものゝ、略韻略音の兩法によるべきは無論である。言語に順序と聯絡とがあつて、一絲も紊れない前後の關係を利用して、運筆數を減ずるの手段を講ずるのである。




多くの場合に於て、動詞は容易に省く事が出来る。談話中の動詞には、必ずそれに對しての主語がある。そして又其語意を明にする助動詞のあるはいふまでもない。さうであるから主語と助動詞とを照應して推測する時は、其中間の動詞は自然判明してくるから、全く省くか、又は最初の一音のみを記すだけで、差支は起らぬのである。



山に 登りました 意見を述べられました





春は花が咲きます 冬になると 氷が張ります



上例中の登りは全く省いても宜しいが、略韻法では  略音法では  自由法では  とも書くので、容易に推定し得られるだけ、それだけ筆数を減じ得るのである。又長鼻促の諸標は省いても其意の通ずるものは、無論書くに及ばないのである。

既知の熟語或は成文で明瞭なものは、最初の一・二音を記し、書線上に一線を引いて、其他は省いて差支ない。... 豈圖らんや  犬も歩けば棒にあたる、の類である。

談話の主題は容易に省くことが出来、人名には其下に  を付け、地名には其下に  を付けて目標とし、最初の一・二音を記せば宜しい。語句の要所又は記憶を要する語の下には、注意標.....をつけて置くと、復文の時非常に便利であるから、臨機にこれを用ひるがよろしい。

(速記實例の復文)

これ で 何 も 彼 も 説明 して
しま いた が 或 は 多 く 省
い て 書 く と 讀 め な く な る
だ ら う と 云 ふ 氣 遣 が 起 る か
も 知 れ ま せ ぬ が そ れ は 無
用 の 心 配 で あ り ます、 始
の 中 は は ぶ き 得 る 所 を 省
か な かつ た り 略 し て い け な
い 所 を 略 し た り し て た び
た び 失 敗 も し ま せ う が 其
こ つ を 悟 る と ス ラ ス ラ 運 ん
で い き ます、 其 こ つ を 覺 え
る の は 練 習 の 結 果 で あ り
ます、 熱 心 に 反 復 練 習 し て
上 達 す る 事 を 切 望 い た し
ます。

(甲)は非省略の書方 (乙)は省略の書き方

第二十一節

速記の實例(甲)

2 v k t H ay ev
 et k l l o s t
 k v k l l y k t o
 k ay l y H e
 k t l o s t l i e t v
 o k. l e s t l e s k
 e l y - l y l i e o ev
 v l l y - o e v e v
 l o - i e t l e k t
 l y - l o l o - l i v
 v k. l y - y l y
 i e l i t v o k. i e
 v l i e ev e l o
 e l y - ay l e k

(乙)

2 v k , l y o v
 et l y o
 k v l l l l l l
 l v l y l y o
 l l l l l l l l l l
 y. k l v - k
 ~ l y - k l l l o v
 ~ l y - o k v
 k - i e t l y
 l l - l l l l l l
 v l l l l l l l
 o l i v y.
 v l i o v l y
 ~ l y - o l y

速記練習帖

毛利式速記術は絶対に鉛筆を排斥はしませぬけれども、鮮明な點に於て、萬年筆を適當と信じます。書方はすべて英習字と同様です。此練習帳は樂譜用紙の代用ともなります。

正價金二十五錢 二冊マデ郵税四錢

修 訂

日本速記法

毛利高範著

羅馬字風の速記文字より成り、諳記不要の略音法にて自由自在に省略され、法則極て簡單、何人も容易に熟達し得る、輕快無比の最新法なり。

正價金一圓五十錢 書留送料金十八錢

近 刊

日本速記術

毛利高範著

本書は速記法の實際を、百拾課で全部修了するの仕組です。獨習に適するやう澤山の例題と速記文字とを満載してありますから、本書について斯術を學び覚えられぬといふ事は決して無いと確信します。

發賣所 神田區表神保町 株式會社 東京堂
振替東京二七〇番

大正九年七月十二日印刷
大正九年七月十五日出版
大正十年七月廿五日修訂再版印刷
大正十年八月一日修訂再版發行

著作權所有

著 者 毛利高範
東京府豊多摩郡澁谷町柏木九百三十一番地
印 刷 者 大久保秀次郎
東京府北豊島郡巢鴨町三丁目十番地
印 刷 所 株式會社 東京築地活版製造所
東京市京橋區築地二丁目十七番地
發 行 所 毛利速記研究所
東京府豊多摩郡澁谷町柏木九百三十一番地
所 株式會社 東 京 堂
東京市神田區表神保町三番地
振替口座東京二七〇番

正價金壹圓五拾錢
書留郵税金拾八錢